

ひ
か
げ

に
じ

日
陰
の
虹

か
ぶ
ら
や
こ
う
し

鏑
谷
嚙
矢

修練町の五十鈴神社の境内で、前の晩から行方知れずになっていた子供の死体が見つかったのは、梅雨明け間近な明け方のことだった。

その年は、おかしな天気が続く年まわりで、春先から急に蒸し暑くなり、梅と桜が同時に咲いたかと思うと、梅雨に入ってから、湿っぽく肌寒い日が続いていた。

死体を見つけたのは、神社の近くで下駄屋を開いている、おさきという女だった。

早くに亭主を亡くしてから、女手ひとつで店を切り盛りしてきたおさきには、およしというひとり娘がいた。

五年前、店で一番の働き者であった番頭と夫婦にし、三年前には、やえとという一粒種を得た。

働き者で従順な娘婿と順調な商い、おさきの申し分ない人生に、影が差したのは春先のことだった。

娘婿が同じ修練町の荒川稲荷裏で殺されたのだ。

それと前後して、おかしな天気が続く蒸し暑さからか、もともと体の弱かったおよしが寝込んでしまった。

医者にかかったものの、およしの病は、はかばかしくはなく、おさきは、およしの回復祈願のために、お百度を踏みに来ていたのだった。

雨の中、いつものように神社に来ると、なぜかは分からないものの、おさきは、いつもとあたりの様子が違うことに気づいた。

気持ちにひっかかっているものが何か分かったのは、神社の真ん中にある檜の木に、女物の帯が巻きつけてあることに気づいたからだ。

色や柄から考えて子供のものだろうと思いつながら、反対側に回ったおさきの目が大きく開かれた。

年の頃、六、七歳の女の子が、帯で木にくくりつけられていたからだ。

木の根本には、降りしきる雨でも流し切れなかった大量の血が溜まっていた。

る。

人形のように整った顔の女の子で、短く切りそろえた前髪から雨水がしたり落ちて、開いたままの目に流れ入り、それが枯れぬ涙のように蒼白い頬を伝っていた。

がら、と時ならぬ雷鳴が轟いた時、呆然としていたおさきの口からやつと悲鳴が漏れ始めた。

「おい、亥の字！」

岡っ引きの留造の胴間声が境内に響き渡り、亥助は飛び上がった。

亥助は、留造の下で働く下っ引きで、何事かと境内に押しかけ、背伸びを
してのぞき込もうとしている野次馬の中に入り込んで、彼らを押し戻してい
るところだった。

雨は一時的にやんではいたが、そのかわり、あたりはひどく蒸し暑くなっ
ている。

「へい、ただいまめえりやす」

小走りに留造の前に出た亥助は、その傍らに立つ同心、檜垣菱之進の姿を
見て地面に片膝をついた。

頭を下げる。

一瞬、目に入った檜垣の表情を見て、亥助は、自分が何のために自分が呼
ばれたのか悟った。

途端に気分が重くなる。

「呼ばれたわけはわかっているな」

留造が、少しゆっくりすぎるくらい穏やかに言った。

「朔之進さまをお迎えに行くので？」

亥助が答えると留造は、

「いつも通り、どんな手を使っても良いから、お連れせよ」と言った。

「しかし……」

「返事はどうした？」

「わかりやした」

「よし、行け」

亥助は立ち上がると、そのまま後ろ下がりに人混みに紛れた。

八丁堀にある檜垣の屋敷までは、五十鈴神社からは四半時しはんとき（三十分）足らず。

歩くうちに、また雨が降り始めた。

屋敷に入り、おとないを入れると、軽い足音と共に、びつくりするほど美しい娘が現れた。

おれんという娘で、檜垣家で下働きをしている。

今年で十七になるその娘の表情は、亥助の顔を見て曇った。

それを見て亥助は泣きたくなった。

二十三の亥助は、おれんを憎からず思っている。

自分は、好き好んで、このお屋敷に来ているわけじゃないんだ。

「おれんちゃん、ぼっちゃんは？」

ことさら陽気に話しかける。

「離れに居られます。でも、あの方は、今……」

「分かってますよ。でも、留造親分の、つまりはお父上のお言いつけなんで」

「いつも通りなのね」

「そう、いつも通りです」

「いつだってそう。旦那様は、ご自分の都合で朔之進様を……」

「とにかく、通りますよ」

亥助は、主を非難するおれんの言葉が聞こえぬ風にそう言い残すと離れに向かった。

「すみません。亥助です」

庭の隅に建てられた離れの前で亥助は声をかけた。

建物の横手では紫陽花あじさいが様々な紫色に咲いている。

その花を見ながら亥助は待った。

しばらくしても返事がないので、再び声をかける。

すると、離れの障子が少しだけ開き、中から白い手が現れた。手招きをする。
る。

亥助は、ゆつくりと履き物を脱ぎ、懐から出した手ぬぐいでさつと足を拭くと障子を開けて部屋に入った。

部屋の暗さに初めは何も見えなかったが、しばらくすると目が慣れ、背中を向けて机に向かう男の姿がぼんやりと浮かんできた。

「閉めてくれ」

よく響く声がそういった。

「障子を、早く、頼む」

「あ、こりや気がつきませんで」

慌てて障子を閉める亥助に男が言った。

「久しぶりだな。亥助」

「へい、朔之進さま」

そう言いながら、亥助は暗さに慣れた目で部屋を見回した。

寢所しじょを兼ねた六畳の部屋は、いつも通り、見事に片付いていた。

だが、それは決して『きれい好き』『きつちり片付けるのが好き』であるという者の部屋ではなかった。

それ以上の、ある種、不気味さのある、整頓のされ過ぎが感じられる部屋だ。

最初にこの部屋に通された時には分からなかった亥助だが、今ならわかる。

この部屋のものすべてが、あまりに見事に右左対称になりすぎているのだ。たとえば、部屋の右隅には一輪挿しが置かれ、桔梗が活けられているが、左隅にもまったく同じ花器で、逆向きに桔梗が活けられている、というように。

頭を振って花から目をそらすと、

「失礼しやす」

そういつて机の前に回り込んだ。

朔之進が、熱心に机の上で動かしている手元が見える。

先ほどから朔之進が熱心にやっていたのは、半紙を、端と端をきちんと併せて半分に分ることだった。

折り方が気に入らないのか、何度も折りなおしているために、紙は、ぼろぼろになっている。

「ぼっちゃん」

「その言い方はよせ。名で呼べ」

「お父上から『来るように』とのお言付けことづけです」

つと、朔之進が顔を上げた。

役者絵そっくりに整った顔がそこにあった。

「駄目だ」

顔をわずかにしかめて朔之進が言う。

「お父上のお言葉ですよ」

「違う、そこに座らずに、もう少し右に寄って座るんだ」

言われて亥助は、自分が机の左寄りに座っていることに気づいた。

「これは、とんだことを」

「何故だ」

「いや、あっしがうっかりしやしたんで」

「わたしを呼ぶわけだ」

「へえ」

やっと話がここまで来た、と亥助が腹の中のため息をついた。

今までの経験から、前置きは抜くことにする。

「幼子が殺されやしたんで。修練町の五十鈴神社の境内で。死体は木に括りつけられて雨に打たれておりやした」

さっと朔之進が立ち上がる。

立つと背が高かった。

亥助も小さい方ではないが、朔之進の耳のあたりまでしか届かない。

「行こう」

先に立って障子を開ける。

「ありがたい」

亥助は思わず呟いた。

いつもなら、朔之進に腰を上げさせるのは、もっと難しいことなのだ。

どうやら今日は心の調子が良いらしい。

しかし朔之進は、そのまま障子を閉めると、机まで戻ってきて再び座った。

もう一度、半紙を手取る。

「ど、どうしました」

「駄目だ。雨が降っている」

「梅雨なもので」

「雨は駄目だ。着物が濡れる」

「裾が少し濡れるぐらいいいじゃないですか」

「少しだから駄目なんだ。全部濡れるならいいんだが」

「子供が殺されたんですよ」

「だが雨だ。雨がやめば出かける」

「今は梅雨ですよ。雨がやむのを待っていたら、いつになるかわかりやせん」

「だが、着物が変に濡れる」

《いかげんにしろい》

亥助は腹の中で叫んだ。

《親分の、さらにその上のお方の命令だとはいいながら、どうして、毎度こんなわけの分からない男と話をしなきゃならないんだ》

「朔之進さま」

うしろで声がした。

振り返ると、おれんが着物を持って立っていた。

「このお着物をお召しくください。これなら雨に濡れても濡れた跡が分かりませぬから」

朔之進の顔がぱっと明るくなった。

「さすがはおれんだ」

この時になって初めて亥助は気づいた。

どうやら、おぼっちゃんには雨に濡れるのが嫌なのではなくて、雨に濡れた跡で、着物に不揃いな模様ができるのが気に入らなかつたらしい、と。

亥助はため息をついた。

四半刻のち――

亥助は朔之進と並んで修練町に向けて歩いていった。

朔之進は、傘を半分閉じるようにして頭の上のにせるようにしている。なるべく外を見ないように、足下だけを見て歩くようにしているのだ。不揃いを嫌う朔之進の目に、世間は不揃いの塊に写ることだろう。考えてみれば不幸なお方だ。

だが、不幸なのは亥助も同様だった。

痩せて、ひときわ背の高い朔之進が、傘を半閉じにして歩いていると、遠目には、大きな一本の傘のお化けが歩いているように見えるのだ。

すれ違う人が、ひそひそとこちらを指さして笑っているのがわかる。

その指先には、隣を歩く亥助も含まれているに違いない。

信じられねえなあ。

半歩遅れて歩きながら亥助はつぶやく。

こんな人が江戸で一番の同心だなんて。

今年で二十七になる檜垣朔之進は、八丁堀同心、ひがきささじゅうろう檜垣佐十郎の嫡男ちやくなんで、今は心の病で離れに幽閉される元同心だった。

六年前、朔之進は、八丁堀同心見習いとして、父の檜垣佐十郎について忙しく江戸の町を見回っていた。

檜垣佐十郎は、同心仲間も一目置く、地獄の鬼のような巨体と面魂つたましこをしていたが、それは次男の道之進の方に受け継がれ、長男の朔之進は、背こそ伸びたが容姿は亡き母親似だった。

朔之進の不幸は、どこまでが真実かは分からぬものの、息子が五つになった年に、突然乱心して自害したと噂される母に、容貌だけでなく心までが似てしまったことだった。

しかし、あの不幸な事件が起こるまでの朔之進は、同心として何ら不足のない人物だったのだ。

優し過ぎ、考え方が下手人の側に立ちすぎるところはあったが、そのために悪人どもをとり逃がすことはなかった。

下手人をひと目で見抜くという点では、他の誰よりも優れた力を持っていた。

特に、殺しの探索は一流で、他の誰もが見つけ得なかった下手人を、独りで捕まえたことが再々あった。

だが、五年前にある出来事があり、朔之進は心にひどい傷を負って、ひとりで表に出ることができなくなった。

そういった心の病は同心としては命取りだ。

また、それは同心の家の者にあつてはならない病だと考えた檜垣佐十郎は、体面を考え、朔之進が病に伏したと称して、庭に立てた離れに幽閉したのだ。
った。

以後、数年に渡って朔之進は忘れられた存在となり、おれんだけが世話係として離れを行き来していた。

一年前、下っ引きになったばかりの亥助が、偶然出会った朔之進と力を合わせて殺しの下手人を挙げなければ、檜垣朔之進は今も離れに閉じこめられたままだったろう。

その時、朔之進は、さえ渡る眼力で、はっきりと下手人を指し示したのだ。

病は、朔之進から同心としての将来を奪ったが、同時に以前に増して鋭い直感と覚える力を与えていた。

素晴らしい頭の冴えを見せた朔之進を、どうやら父佐十郎は利用しようと考えたらしい。

近頃では、下手人が挙がらない殺しや、奉行から催促された押し込みなどは、名を出さぬように気をつけながら、亥助を使って朔之進を外に連れ出させ、下手人を探索させるようになっていいる。

だが、いくら下手人を挙げたとしても、朔之進が檜垣家の家督を継いで同心に戻ることは、もはやあり得ないのだ。

朔之進の代わりに、本来なら、部屋住みとして嫡男の不慮の事故に備え、一生を日陰者として暮らして行かねばならぬ身であった次男の道之進が、同心見習いとして表舞台に出ているからだ。

道之進の顔を思い出して亥助の唇の片端が吊り上がった。

亥助は檜垣家の次男が好きではなかったからだ。

大男にありがちな、力を持たない小柄な者を馬鹿にする癖のある道之進は、病気になった兄を、あからさまに見下していた。

あるいはそれは、かつて下主人の探索でも、剣の腕でも容姿でも到底敵わなかった兄への、弟としての反感の現れなのかも知れないと、亥助は思っている。

色々なことを考えながら歩いていると、

「亥助」

朔之進が傘越しに声をかけてきた。

「へえ」

「母親の病気は、もういいのか」

「おかげさんで」

答えてから亥助は口を押さえた。

「どうして分かったんで？あつしは何も言っちゃいませんぜ」

「聞かなくてもわかる。普段から、俠氣を押し出した物言いをしてはいるものの、お前は着ていく着物の用意から、髪の手入れまで母親任せだ」

「それで？」

「今のお前は、顔には無精髭が伸び、着物が皺だらけだ。母のおたけが元気であれば、そんなことがあるはずはない」

「病気じゃなくて、のんびりと箱根にでも行っているだけかもしれないぜ」

「すまぬ。初めに申すべきだった。わたしは、さっき、お前の懐から頓服の袋が出ているのを見つけたのだ」

言われて亥助は、今朝、新しく薬をもらいに漢方医限庵のもとに行つたことを思い出した。

「薬だけなら誰が飲むかはわからぬ。だが、お前の身なりとあわせれば、ほぼ答えはひとつに決まる」

「恐れいりやした」

「おたけはどうしたのだ」

「へえ。四日ばかり前に、棚の上の壺を取ろうとして、踏み台から滑り落ちましたんで。まあ、限庵先生の診たてによると、半月ほどおとなしくしてりやあ元通りになるとのことでした」

「その頓服は」

「踏み台から落ちたのは、上を向いた時に目が眩んだからだそうでした。こいつはそっちの方の飲み薬だそうです」

「そうか」

「それより旦那、今度の殺しについて、向こうに着くまでに、あらましをお話しときやす」

朔之進は、傘の中から返事をしない。

だが、どんな時でも、このおぼっちゃんに耳にしたことを記憶し、考えずにはいられないのを知っている亥助は、懐から控え書きを取り出し、それに目を落しながら話を続けた。

「ことの起こりは、ひと月前のやっぱり雨の夕方でした」

駿河町の真綿問屋、手島与平のひとり息子善助が、頭から血を流して近くの空堀に浮かんでいるのが見つかった。善助は七つで前の夕方から行方が分からなくなっていたのだ。

それから三日後の雨の朝、瀬戸物町の紙商、長崎屋の長男秀次が、近くの西園寺境内で、首を絞められて殺されていた。

秀次は六つで、前の日の昼過ぎから行方が分からなくなっていた。

さらに五日後の雨の夜、石原町の経師屋、石蔵の娘、おまちが、近くの路地で頭を殴られて死んでいた。

おまちは八つで、その日の昼過ぎから姿が見えなくなっていた。

その六日後の雨の朝、つまり今から九日前、佐久間町の小間物問屋白杵屋しらきねやの次男、新太が、近くの取り壊しの決まった人気のない裏長屋で頭を殴られて殺されていた。

新太は九つ。

前の日の夜から姿が見えなくなっていた。

「というわけで、住んでいる場所も殺された場所も、子供の年もばらばらで、四人の子供たちにはつきりとした繋がりは見つかりやせん。親同士も顔すら見たことがない他人のようで」

半閉じにした傘をさしながら、黙々と歩く朔之進の背中に向けて亥助は続ける。

「ですが、殺され方は頭を何かで殴られるか、手ぬぐいのようなもので首を絞められているかのどちらかで、雨の中に死体が放り出されていることも似ています」

「その話を聞くだけでは、下手人は独りではなく、たまたま子供ばかりが続いて殺されただけかも知れない。刃物を使わなければ、殺し方は限られてくる。硬いもので殴るか、首を絞めるかだ。それに、今は梅雨だから死体を放っておけば、雨に濡れるのは当たり前だ」

「留造親分も、そう考えておられるようです。しかし、どうも親分の勘では、この殺しの下手人はひとりだと感じるんだそう」

「留造がそう感じるなら、おそらく下手人は独りだろう」

「へえ」

——なんでいきなりそうなるんだ？

そんな気持ち声が表れたのだろう。

朔之進は立ち止まり、傘をわずかに上げて言う。

「納得できんか？」

「い、いえ、ただ……理由はあるんですかい」

「長年、岡っ引きをつとめる留造が勘でそう感じるなら、おそらくそれは正しい。わたしは中途半端な理屈よりも、親分の直感を信じる。それほどに大したものなのだ、岡っ引きは」

それだけ言うと、朔之進は再び黙り込んで道を歩き出した。

その背中を見つめながら、亥助は二日前に起こした兄との口げんかを思い出していた。

亥助の生業は樽屋だ。先年、父親が死に、兄の弥八が跡をとって三代目になった。

兄よりも弟の自分を可愛がってくれる母おたけのおかげで、亥助は樽職人の修行も半端なままに、留造親分のもとで下っ引きをやっているが、兄はそんな弟を快く思っていないようだった。

確かに岡っ引きは、裏の世界に通じた、半分やくざ者のような輩が多く、お役目の上で知ったことで大店を強請るようなことがよくあった。

そのために、今までも何度か、お上から役人に岡っ引きを使ってはならぬとお達しはあった。

しかし、裏に通じた小者を使わない限り下手人を挙げるのは到底無理であるのは、お達しを出す奉行ですら知っていることであつたので、今もなお、済し崩しに岡っ引きは使われ続けている。

しかし、岡っ引きは悪で、その下で働く下っ引きに至っては石をひっくり返した時に出てくる地虫のようなつまらぬものどもだ、というのは広く世間で認められた考えであつたし、兄弥八の考えもそうだったので、おたけが寝込んだ時を見計らつたように、弥八は、下っ引き稼業から足を洗って、まっとうに桶職人の修行をするように詰め寄つたのだ。

「このままじゃ、おめえはくずのままだぜ」

弥八の言葉が耳に甦り、亥助は顔をしかめた。

「着きましたぜ」

振り返った亥助は、朔之進に声をかけた。

亥助にとつてありがたいことに、雨があがりかけているため、朔之進も先ほどまでのお化け傘の格好をやめている。

畳んだ傘を左手に下げ、すつきりと立つ朔之進の涼しげな顔かたちは、まるで役者絵から抜け出たように垢抜けていた。

野次馬の数は減っていたものの、かなりの数の男女が境内には残っていて、件の檜の木を輪を作るように取り囲んでいる。

輪の中心に娘の死体があった。

すでに、木からは下ろされ箆むしろがかけられている。

その体にすがって夫婦らしき二人が泣いていた。

「やっぱり来やがったか」

小声ながら、はつきりとした嫌みを耳にして亥助は振り返った。

檜の木の側に、他の者より耳から上が抜きんでている大男が立っていた。

朔之進の弟、道之進だ。

「別にあんたの助けなんかいららないんだぜ。離れにすっこんでいりゃいいものを、なんで出てくるんだ。なあ……」

言いつのる弟を一切見ないで、朔之進は、とりつかれたように木の枝に掛けられた帯を見続けた。

亥助が神社を出るときには骸むくろごと木に巻かれていたのだから、娘を降ろした時に誰かが枝に引っかけたのだろう。

「朔之進さま」

背後から声をかけたのは留造だった。

兄弟の父、佐十郎は少し離れて立ち、目を閉じて腕組みをしていた。

朔之進は木に近寄って帯を手にした。

長い付き合いで朔之進が何をしようとしているのか分かった亥助は、舌打ちをしそうになった。

案の定、朔之進は、表情を変えずに、木に掛かった帯の長さをそろえるためにオビの短い方を強く引き始めた。

病気のために、朔之進は「不揃い」「半端」というものをひどく嫌うようになっていたのだ。

いや、嫌うといより、あらゆるものを「半端」なままにしておくことができなくなっているのだ。

雨に濡れた帯は容易に動こうとはせず、朔之進は、さらに腕に力をこめて帯を引っぱり始めた。無表情なだけに、その姿には鬼気迫るものがあり、見慣れている亥助ですら背筋に粟粒が立つのを感じるほどだった。

さすがに留造は慣れたもので、自分の呼びかけにもまったく答えようとせず、帯を引っ張り続ける朔之進に平然と話を続ける。

「これまでの殺しについては、亥助からお聞きになったと思います」

そう言って自分を見つめる作蔵に、亥助はしっかりと肯いた。

「あそこに寝かしてあるのが殺された娘です。名前はおとみ、富沢町で染種そめぐさを商う美濃屋のひとり娘です。骸は雨の中、その櫛の木におとみ自身の帯で括くくり付けられておりました。

美濃屋に尋ねたところ、商売人であるからには、多少は人から恨まれることがあるにしても、娘を殺されるほどの恨みを買うことはない、とのことです。これは、今までの殺しから見ても、おそらく正しいでしょう」

普段は乱暴な物言いの留造が、ひどく丁寧な口ぶりで話すのは、朔之進が仕える同心の息子であるから当然なのだろうが、それだけではないように亥助には感じられた。

以前、酒の席で留造がふと漏らした言葉から、朔之進が見習い同心であった時、その下で働いていた留造は、次に自分が仕えることになる若い同心の、下手人を見抜く眼力のすごさを、身をもって感じていたのだ。

「今回も、子供たちの間にはつきりとした繋がりはないのか」

やっと帯の長さを揃えた朔之進は満足そうに頷くと尋ねた。

「へえ」

「わかった」

「こちらが美濃屋です。何かお聞きになりますか」

朔之進は、ゆっくりと首を振りかけたが、突然その目は強ばり、ついで大きく見開かれた。

その目の先を追った亥助は、朔之進が、寝かされた娘の死体を、じっと見つめているのを知った。

「どうなすったんで」

留造の問いかけに呻くように問い返す。

「この娘は殴られてはいないし、首も絞められていない」

「へえ。その通りで。今までの子供と違って、心の臓を刃物でひと突きでき。流れた血は多かったとは思いますが、雨がそれを全部流してしまっただけ

よう

「うう」

呻くように低くそう言うと、朔之進はいきなり留造に背を向けた。

「亥助、行こう。もう見るものは見た」

そう言い残し、朔之進は留造にも、父親にすら挨拶もせずに境内を後にした。

いつの間にか雨は止んでいた。十日ぶりに薄日まで差し始める。

神社を出て、朔之進の後を歩きながら、亥助は境内に残った道之進が、おそらくは悪しあ様に朔之進さくしんのことをのしつているのを確信していた。

頭の横で、指をくるくると回しているかも知れない。

せめて人並みに挨拶ぐらいして欲しい。

無駄と知りつつ、亥助は切実にそう思うのだった。

ふと気づくと、前に行く朔之進が妙な歩き方をしていた。

まっすぐに歩かず、踊るような足取りで右に左に向きを変えながら道を進んでいるのだ。

すれ違う人は皆、何事かと朔之進の顔をのぞき込んでいる。

——始まった。

亥助は呻いた。先ほど、雨が上がり薄日うすびが差した時点で心配はしていたのだ。

ふたりは今、末広町すえひろまちの通りを歩いている。

左右に建物の軒が迫った、それほど広くはない通りだ。

軒は陽の光によって影を落とす。

影は地面に軒の形に模様を描く。

そして、朔之進は、その模様を踏んで歩くことができない。

だから、彼の足は踊りを踊るように不規則な運びになってしまうのだ。

「これからどこに行くんです」

朔之進の邪魔をしないように（と、知り合いだと知られるのが少し恥ずかしいので）、さらに一步後ろに下がって歩きながら亥助は尋ねた。

「屋敷に帰る。もう八つだ。おれんの点てた茶を飲まねばならん」

言われて、亥助は、朔之進が毎日八つに必ずお茶を飲むことを思い出した。

「でも、お坊ちゃん。早く下手人を見つけなさいと」

「その呼び方はやめて朔之進と呼ぶように言ったはずだ。大丈夫。今日中には下手人を挙げられるはずだ」

「ほんとですかい」

「根拠はないが自信はある」

「おかえりなさいませ」

八丁堀の屋敷に戻った二人をおれんが出迎えた。

「亥助さん」

朔之進に続いて離れに入ろうとする亥助をおれんがとめた。

「なんですかい」

そのまま亥助の袖を引いて、離れから玄關脇に連れていく。

「朔之進さまのご様子が、ちよつとおかしいみたいだけど、どうかしたの？」

確かに神社を出てしばらくは、様子がおかしかった。

今は普段通りに戻っているはずだった。

それを、ひと目見ただけで見抜いたおれんの勘の良さには驚かされる。

「おかしいって、あのお人は、いつも少しおかしいでしょう」

「茶化さないで。本当のことを言って」

「確かに、少し妙な素振りしておられた。殺された女の子の死体を見た途端

――

「女の子——亥助さん、その子は刺されてなかった。たぶん……心の臓を」

「その通りでさ」

亥助は驚いておれんを見た。

「わかったわ」

「でも、それは関係ないでしょうよ。今までも、二人でたくさん殺しや死体を見てきたけど、あの人は平気だった」

「たぶん、今までは、女で心の臓を刺された人がいなかったからよ。思い返

して見て」

おれんに言われて、亥助は昔を振り返ってみた。

「そういえば、確かに無いな。女の殺しは全部殴られたり、首をしめられたりだった。でも、なんだって刺されちゃ駄目なんだ」

「ああ、亥助さんは知らないのね。姉さんのこと」

おれんは目を伏せた。

「おれんちゃんにはお姉さんがいたのか」

「ええ、五年前に殺されたけど」

「まさか、おれんちゃんの姉さんって、おさとさんなのか」

亥助は驚きの声を上げた。

「そう。朔之進さまに送っていただいて家に帰る途中、心の臓を刺されて死んだのはわたしの姉だった」

「知らなかったなあ」

同心としての眼力で将来を囑望しよくぼうされていた朔之進が、屋敷の下働きの娘と夜道で襲われ、おさとというその娘を殺されて心を病んでしまったということとは聞いていた。

だが、その妹がおれんであることも、おさとが心の臓を突かれて死んだことも亥助は知らなかったのだ。

「だから、美濃屋の娘が刺されて死んだと知って様子がおかしくなったのか。どうすればいい」

「何もしなくていいわ。朔之進さまはもう大丈夫なはず」

「そうかなあ」

「病はあっても、あの人は強い方です。さあ、もう八つですから、お茶を差し上げましょうね」

そう言い残して、おれんは離れに戻っていった。

こんな時、亥助は二十三の自分より、十七のおれんの方がずっと大人だと

感じてしまうのだ。

去年亡くなった朔之進の母さきえから、三年にわたって厳しく作法をしつけられたために、おれんは、お茶お華ともにひと通りのことができる。

「茶を飲んだら、今まで殺された子供たちの家を回ってみよう」

おれんの点てた茶を喫しつつ朔之進が言った。

「留造親分が何度も足を運んで何も出なかったんですよ。今さら出かけても

……」

「違う目で見れば、何か違うものが出てくるはずだ」

「わかりやした」

さつきまで留造親分を信じていると言っていたのになんだい、と思いながらも亥助は頷く。

「なんだ。不服か」

目ざとく亥助の顔色を読んだ朔之進が尋ねる。

「とんでもございやせん」

「留造を信じないわけじゃない。というより、留造の腕を信じるからわたしが行かなければならないのだ。おまえは、留造の覚え書きをもっているな」

「へえ。親分が尋ねて、あつしが書き取ってやすんで」

「文字に明るくて筆跡てもきれいなのがおまえの良いところだ」

「ありがとうござえやす」

亥助は頭を下げた。

初めのうち、子供たちの殺された順に家を回ろうと考えたのだが、そうすると、最初の駿河町と二番目の石原町では、まるで逆の方角になってしまうため、朔之進と亥助は八丁堀に近い順に回ることにして屋敷を出た。

まず最初は、佐久間町の小間物問屋、白杵屋を訪ねた。

この家の次男である新太は四番目に殺されている。

殺されてまだ九日しか経っていないためか、小間物屋夫婦は、涙で満足に話もできないほどであったが、途切れ途切れに話す内容は、亥助が書き留めておいたものと大差はなかった。

「他に、何か思い当たることは無いか」

亥助の問いかけにも若い夫婦は涙ぐむばかりで、繰り返すのは、なぜ、うちの子がという愚痴ばかりだ。

「あんなに元気だった子がどうして」

「同じ事を何度もいってもしようがない。親父が言っていたように、あの子は白狐さんが連れて行ってしまったんだよ」

妻をたしなめながら白杵屋は涙をこぼした。

「でも、なんでうちの子が……」

ふたりの嘆きを聞くのに堪えかねた亥助が腰を上げる。

「朔之進さま、行きましょう」

次に訪ねたのは、瀬戸物町の紙商長崎屋だった。

六歳の秀次は三番目に殺されている。

仏間に通されて話を聞いたものの、内容は白杵屋と大差なかった。

仏壇の前に置かれた桐の箱の上には、かつて秀次が好んだのであろう乾菓子が所せましと並べられている。

「ちよ、ちよつと朔之進さま」

亥助は首を絞められたにわとり鶏のような声を出した。

長崎屋夫婦に話を聞いていると、いきなり朔之進が仏壇ににじり寄り乾菓子に手を伸ばし、並べ替え始めたからだ。

「何をするんです」

「いや、並べ方がでたらめなのでな」

「そのままにしてください」

「すぐ済む」

朔之進は手早く東を並べかえた。

「止してください」

突然、亥助が悲鳴のような声を上げたのは、朔之進が、お菓子の一つを、夫婦にひと言の断りもなく懐に放りこんでしまったからだ。

「これでいい、こうしないと数があわないので、きれいに並ばぬのだ」

「さあ行きましょう」

目を丸くして朔之進を見つめる夫婦を残し、亥助は朔之進の手を引っ張って外に出た。

次に訪ねた石原町の経師屋石蔵きょうじやの娘、おまちは二番目に殺されていた。

「俺はね、旦那。大きい声じゃ言えませんが、昔は相当のワルだったんです。

いくら親父が諫めても聞きやあしなかった。それが、こいつと一緒になって、おまちが生まれた時に、きつぱりと昔の自分と縁を切ったんで。でも、やっぱり昔の悪業は祟るのかねえ。こんなことになっちまってよお」

「石蔵、お前は信心深いほうか？」

「いや、俺は……やつぱり、信心がなかったからこんなことになっちまったのかねえ。親父は人一倍信心の深い男だから、俺と親父を足せば普通じゃねえのか、なあおい」

「行こう、亥助」

最初に殺された駿河町の真綿問屋、手嶋与平のひとり息子善助は、空堀に頭から落ちて死んでいた。初めはあやまって落ちたのかと思われたが、調べてみると、頭を殴られてから、堀に突き落とされたのだということが分かったのだ。

「何も話すことはありません。どうぞお帰りください」

初めのうち、髪に白いものが混じる与平は頑なな表情でそう言った。

「何を言ってもあの子が帰ってくるわけではございませんから」

「与平さん、善助は本当にあなたの……」

亥助が尋ねようとすると、怒ったように与平が遮った。

「子供かと仰おっしゃりますか。善助の父親としては、手前が年を取りすぎていると」

「いや、そういう訳じゃないんだが」

「手前は今年で五十二になります。実を申せば、善助の前にひとり、息子がおりました。生きていれば二十八にもなりましょうか」

「生きていれば……亡くなったんで？」

「そうです、六年前に。そうして、五年前に連れ合いが死んだ時には、すっかり気落ちしました。もう手前の人生は終わったのだと。そこへ、柳橋やなぎばしの女が善助を連れて訪ねてきたのです。あなたの子供です、とね」

「あなた、それを信じたのか」

「信じて悪いわけがありませんか？確かに、その女とは何度かそういったことはありましたし、なにより、手前には新しく現れた家族が輝くような宝に思えたのでございますよ。」

あなた方は、お若いから、お分かりにならないでしょうが、とどのつまり、人の値打ちとは、自分の作り上げたものを身内に残してこそなのですよ。それがなければ人生は無駄です。善助が死んで手前の人生も無駄になってしまいました」

「その柳橋の女には、今度のことは？」

「あれは、手前に善助を渡してすぐに死にました。男に斬られたんです。悪い付き合いの多い女でしたのでね」

「最後にひとつ。良いかな」

朔之進が穏やかに尋ねた。

「何も話す気はなかったのですが、つい話してしまいました。ついです。何でも仰ってください」

「おまえの羽織の紐の結び目が揃っていないので、結びなおさせてくれ」

「次はどうします？朔之進さま」

通りに出た朔之進に亥助が尋ねた。

「部屋に帰る。早く帰らないと、おれんが心配するからな」

「まだ何も新しい話は出てきてませぬ。留造親分の控えを確かめただけだ」

「いや、だいたい話の筋は見えた」

「本当ですか」

亥助が疑わしげに言う。

きょう一日をかけて朔之進がしたことは、子供を失って気落ちしている親の気持ちを逆撫でしたことぐらいのように思えたからだ。

「亥助、ひとつ頼みがある」

「へへ」

「最後に訪ねた真綿問屋、手嶋与平の、上の息子の死んだ理由と柳橋の女が本当に死んでいるのかを確かめてくれ。ああ、これだと頼みがふたつになる。

いや、やっぱりひとつか。とにかく頼む」

「わかりやした」

さっぱり要領を得ないまま亥助は走り出した。

何がどうなっているのか分からない亥助であったが、朔之進が分かったと言えば、おそらくは本当に真実に行き当たっているのだ。

他のことはともかく、朔之進に関して、そのことだけ亥助は確信していた。

「おれん」

朔之進が声を掛けると、障子に影が映りおれんの声が応えた。

「はい、朔之進さま」

するりと障子が開けられ、おれんが顔を見せる。

「いつもより遅くまで残らせて申し訳ない。もうすぐ亥助が帰ってくると思う。あいつには無理をさせているので、茶でも飲ませてやりたいのだ」

「わかっています。亥助さんが帰ってくるまで、朔之進さまも、お茶はいかがですか」

「お前さえよければ」

「すぐに用意いたします」

「ただいま戻りました」

おれんが点てた茶を喫しながら、今日一日の出来事を話していると、息を切らせて亥助が部屋に駆け込んできた。

「せつかくやんでた雨がまた降ってきやがりましたよ」

「亥助さん、せつかく朔之進さまがお茶を飲まれているところなのに騒々しすぎます」

おれんが軽く亥助をにらんだ。

「いいさ、構わない、それでどうだった」

「旦那はつくづく恐ろしい人だ。最初から分かってたんですかい」

「やはり息子は生きていたか。それで、息子は面打ち師か」

「な、なんで分かるんで」

「話してくれ」

「へい」

亥助はそう言って、おれんが茶とともに出してくれた饅頭を頬張りながら話し始めた

「旦那に言われたとおり、まず柳橋の女つてやつを調べに行きやした。これは何のことはなかった。柳橋じや有名な女だったんで、あの辺を縄張りになっているどぶろくの言蔵って親分に話を入れると、すぐに教えてくれたんでさ。名前をおみちと言いやした」

「死んでいたか」

「へい。与平が言った通り、おみちは、二年前に、やくざ者との痴話げんかの挙げ句斬り殺されておりやす。ただ、その前に、誰か男と住んでいたところで、腹が大きいところも見られおりました。ちょっと調べてみたら、驚きやしたぜ、その男つてのが……」

「面打ち師、与平が死んだと言い切った長男だな」

「そ、その通りで。どうしてそれがお分かりになったの？」

「与平は、息子が生きていれば二十八になる、といった。六年前に死んだのだと。二十二の年に死んだということだ。普通、死んだ幼子の年は数えるものだが、大人の年は数えぬものだ。それがひっかかった。何年か前に死んだ、生きていれば三十近い息子の年を正確に覚えているというのはどういう時だ」

「そりゃあ、息子がどこかで生きている時でさ」

「そうだ。まだ生きていて、今、どうしているのだろうと、親が気に掛けている時だ。では次だ。生きていながら、親からは死んだものと見なされる、それはどんな時だ？」

「あつ、親の思い通りにならねえ時だ」

「そう。息子が悪い道に進んで罪人になるか、自分の思い通りにならないかのどちらかだろう、私にはそう思えた。まあ、それ以外に、病気や怪我で、ものの役に立たなくなるというものもあるが——」

「旦那……」

亥助は言葉につまった。朔之進は、自分のことを言っているのだ。

「もし身内に罪人がいるなら、最初に調べたのが父上と留造であれば見逃すはずがない。だからその線は考えなくて良い」

「なるほど」

「話しぶりから、与平はかなり私の強い人間に思えた。だから、息子が、もし自分の思い通りに生きようとしなければ……」

「死んだものにしてしまう」

「そう、与平の息子は、家業を継がず遊び惚けていたか、好きな道に進んでしまった。だから与平は、自分の気持ちの中で息子を殺してしまった」

「なるほどねえ。それで、息子が面打ち職人っていうのは？」

「それは、半分以上は賭けだった」

「でも当たってやした」

朔之進は、しばらく黙ったあとで口を開いた。

「今回、殺された子供の家を回って一つ気づいたことがある」

「なんです」

「一見、何のつながりもない子供たちを、ひとつにつなぐものが見つかったのさ。おまえも同じものを見ていたから分かるだろう」

そう言われても亥助にははわからなかった。

「なんでしょう」

「面だ」

「面って、あの顔につける」

「そうだ。それも狐の面だ。最初に訪ねた白杵屋は『あの子は白狐さんが連れて行ってしまった』と言っていた。

二番目に訪ねた長崎屋では、仏前に桐の箱が置いてあった。その上に子供の好きそうな菓子が並べてあったところから考えると、桐の箱の中身は、子供の好きな何かだ。わたしは、箱の中身を見てみたかったが、うまくいかなかった」

——そりゃあ、若旦那が、干菓子を並べ替えてたからでしょう。

喉まで出かかった言葉を、ようやく亥助は飲みこんだ。

「三番目に回った石原町の経師屋で、やっと見たかったものを見ることができた」

「何かありましたかね？」

「経師屋は、それまでに回った中では一番狭い家だった。だから、わたしは家に入る前から、きつと何かが見つかると思っていた。案の定、部屋の壁に、狐の面が掛けられていた。それも小さい子供用の面だ。出来も良かった。少なくとも、もつと裕福な家では、桐の箱にいれてしまっておこうと考えるほどによくできた面だった」

「白杵屋の桐の箱には、面が入っていたと」

「あとで調べればすぐわかることだ。」

経師屋の石蔵は、父親が信心深いと言っていた。白狐面を持ってきたのはその父親に違いない。

最初に殺された駿河町の真綿問屋、手嶋与平だけは白狐面びやくことの関係がわからなかったが、どうも、生きているらしい息子を死んだものとして扱っていることから、その息子が面打ち職人になっていたとすれば、白狐面との関係が出てくると考えた。何も証拠はなかったが、調べてみて損はない」

「はい、実際はそうでした」

「さらに手嶋屋については、もうひとつある。さっきも言ったように、私の強い性格の男が、いくら家族が死んで寂しかったからといって、本当に自分の子供かどうかわからない子を引き取って育てるものだろうか。それよりも、その子は与平の子供ではなく孫、つまり息子の子供だと考える方が自然だと思っただけだ」

「面打ち職人になった息子の名前は佐吉です。おみちは佐吉と夫婦になって、子供を生み、その後、佐吉と別れて新しい男と暮らすために、善助を与平に

押しつけたんでき。その時に、少くない金も受け取っていやす」

「よく調べたな」

「ありがとうございます」

「でも、なぜ佐吉は善助を引き取らなかったのかしら」

はじめておれんが口を開いた。

「能面打ちに命をかけている佐吉にとって、善助は邪魔な存在だったのだから。職人にはそう考える者がいる。それで、佐吉には会えたのか？」

「佐吉は、三日前から箱根に出かけていて会えませんでした」

「箱根。何をしに？」

「向こうの奉納ほうのうたきぎのう薪能しんで使う能面を打つためだそうです」

「では、佐吉さんは下人ではありませんね」

おれんが、心なしかほっとしたように言った。

「佐吉は頼まれて子供用の白狐面びやくこを打つただけだ。そして、そのうちのひとつを我が子に与えた」

「子供たちが、佐吉の白狐面で繋がることはわかりましたが、いったい誰が、なぜ白狐面を持つ子供を殺したんです？」

「さつきも言ったが、経師屋の石蔵の父親は宗教に熱心な人間だった。その男が孫に白狐面を与えたんだ。それに、おまえがさつきいった長崎屋で見かけた桐の箱だ。あれには表書きは無かったが、荒川という判が隅についてあった」

「分かった。お稲荷さんね。修練町の荒川稲荷」

あつと亥助は小さく叫んだ。跳ねるように立ち上がる。

「旦那、あつしはひとつ走り行って来やす」

「行かなくていい。さつき、わたしが駿河町からの帰りに荒川稲荷に寄って確かめて来た。荒川稲荷は、もともと石原町にあって、百年前に修練町に移されたらしい。そこで、今年の春、移転百年の祝いをかなり大きく執り行っ

たようだ。信者を増やすための方便だと思うが、その時、寄進をした者が望めば、身内を、お堂にひと晩お籠もりさせるということをやったらしい」

「お籠もりするとどうなるんで」

「身体頑健気分明朗と謳ってあった。わたしも籠もるべきだったか。まあ、身内といっても、子供だけということなので、だいたいは寄進者の孫になるらしい。その時に渡されたのが、あの白狐面だ」

「なるほど」

亥助はうなった。

「殺されているのは、お堂にこもった白狐面を持つ子供たちってわけですね。だから、子供たちに、はっきりとしたつながりがなかったんだ。でもなぜ子供たちが殺されなきゃならないんで」

「あ」

おれんが叫んだ。

「もしかしたら、そのお籠もりの夜に、子供たちは何かを見たのかも」

朔之進が頷く。

「だったら旦那、お籠もりの人数が分かれば、狙われている子供の数も分かるわけですね」

「それも聞いたよ。六人だ。お堂に籠もった子供の数は」

「すぐに知らせに行かないと」

「さつき知らせておいた。だが、その必要も無いだろう」

その時、離れの玄関で、おとないの声がした。

誰だろう、と顔を見合わせるおれんと亥助に、朔之進が穏やかに言う。

「どうやら来たようだ。通してくれ」

「はい」

おれんが立ち上がって玄関に出て行く。

しばらくして、おれんが戻ってきた。

障子に、おれんの影ともうひとりの影がうつり、部屋の前で立ち止まる。

「どうぞ」

影が動き障子が開かれた。

入ってきたのは、四十がらみの上品そうな女だった。

「あ」

亥助が叫んだ。

「亥助は知っているだろうが、この人は、おさきさん。修練町で下駄屋を開いている。そして今日、美濃屋の娘おとみの死体を見つけた人だ」

おさきの顔色は蒼白で唇までも白っぽかった。

おれんは、その唇が細かく震えているのを見た。

「そして、この白狐面殺しの下手人でもある」

蒼白な顔のまま、おさきは笑おうとし——しくじって涙をひとつだけこぼした。

「と、申してよろしいでしょうか？」

厳しい表情で朔之進が言う。

「それで結構です」

朔之進の表情が、ふ、と緩^{ゆる}んだ。

「わかりました。では、今回の事のあらましをわたしの口から話させていただきます。もし、大きく間違っていることがありましたら、お教えください。

事の起こりは、ふた月前、まだ春先の夜のことです。おさきさんは、娘婿の——いや、名前は良いでしょう。その男と口げんかをしました。その元となったのは、何でしょうか、男の浮気だったのか、店の金の使い込みだったのか、とにかく、激しくふたりはやり合いました。

これはわたしの考えですが、その時、男の方が刃物を出して、襲いかかったのです。前からの考えであったのか、怒りに我を忘れてのことだったのか、それは分かりません。

おさきさんは、自分の命を守るために、とつさに懐に持っていた下駄修理のための金槌を取り出して男の頭を思い切り叩き、男は死んでしまいました。その時に、おさきさんは、背中がたりという物音を聞いて立ちすくみましました。

店には、住み込みの者も多数いるため、この話し合いは、近くの荒川稲荷神社のお堂裏で行われたのですが、ちょうどその日に限って、子供たちによる子供たちだけの「お籠もり」が行われていたのです。

振り返ったおさきさんの目に、お堂の横に浮かぶ白いお面が写りました。見られた。どうしよう。そう思った時には、もう子供の姿はありませんでした。おさきさんには、どうすることもできません。襲われたからこそ、相手の男を殺せたのです。その恐ろしさが去った後では、罪のない子供を殺せるわけがない。

家に逃げ帰ったおさきさんは、何日かは恐ろしさに震えて過ごしました。骸が見つかり、岡っ引きが店の近くをうろついても、おさきさんに疑いはありませんでした。ひよつとしたら、このまま何事もなく終わるかもしれない。

そう思ったおさきさんでしたが、たったひとつだけ気がかりがありました。そう、あの白狐面の子供のことです。あの子を何とかしないといけない。おさきさんは、勇気をふるって荒川稲荷に、あの夜のお籠もりについて尋ねました。

大事な娘婿を殺されたあなたに、お寺の人々は寛容です。すぐに何もかも話してくれました。

おさきさんは、あの夜、お籠もりをしていたのが子供だけであること、皆がばらばらの場所から集まっていること、子供の数が全部で六人であることを知りました。

なぜ、あの子が見たことを黙っているのかはわかりません。でも、わけは

ともかく、今ならなんとかなりそうです。

やるべきことはすぐに決まりました。

でも、おさきさんは、それを実際に行うことができませんでした。

たったひとりの証人を消すために、六人全員を殺すことができなかったのです。

とうとう心を決める日がやってきました。それは病に倒れ、熱にうなされながらも、孫娘の心配をする娘の姿を見たからです。

初めは、修練町から一番遠い駿河町から始めました。道具は手ぬぐいと金槌、どちらか良い方を使いました。

声を出させず、手早く済ます時は金槌を。

時間のある時は手ぬぐいを。

ふたつの方法を使い分けたのは、おそらく、いつも同じ手口だと、今は気がつかない同心たちも、いつか荒川稲荷にたどり着く恐れがあったからです。

そうして、五人まで、あなたは子供を殺めてしまいました。

だが、おさきさん、あなたは、たったひとつ大きな間違いをされていた」

「なんでしよう」

「さつき、わたしは確かめてきたのですが、あの白狐面は、前向きに着けるのではなく、あたまの後ろにつけるものだったのです」

「なんですって」

「それが証拠に、あの面の目の部分はくり貫かれておりません。つまり、あなたが見た白狐面の子供は、あなたに背中を見せていたのです。おそらくは、夜のはばかりが恐ろしくて、お堂の外で用足しでもしていたのでしょう。つまり、あなたは、子供に男を殺すところを見られていなかった」

朔之進は、ふうと一息ため息をつくと続けた。

「どうでしょう。大きな間違いは無かったと思いますが」

おさきは、静かに微笑んで言った。

「檜垣様。お名前は何とおっしゃいますか？」

「朔之進と申します」

「お優しい方。わたくし、とても、そう感謝しています」

「そんなことは言わないください。わたしは、あなたを磔にするんですよ」

「いいえ、あなたは、わたしを救ってくださいだったので。ほんの今まで、わたしは心配で恐ろしくて、生きた心地がしませんでした。生きたまま死んでいたのです。でもあなた様のおかげで、わたしは生き返りました。これで、ちゃんと仕事のできる母親を孫に残してやれます。わたしのことで苦労はするでしょうが。でも、どうか覚えておいてくださいませ。体が死ぬ前に心が死んでいるより、体が死ぬまで心が生きているほうがずっと良いのです」

「そのとおりですね」

朔之進が優しくいった。

「よくわかります」

その時、離れの外が騒がしくなり始め、留造と檜垣佐十郎が部屋に現れた。黙って朔之進を見る。

「この方が下手人です。取り調べにたいして一切の隠し立てなく、すべて本当のことを話されることは、わたしが請け負います」

朔之進の言葉に頷いて、おさきは言った。

「この方のおっしゃる通りです。わたしがすべての子供たちを殺しました。

どうか、どこへなりとお連れくださいませ」

留造に連れられて、おさきが出て行った後も、佐十郎はしばらく部屋に立っただままだった。

朔之進を見つめている。

が、やがて踵を返すと部屋を出て行った。

くす、と、おれんが笑った。

「不器用な方。素直にありがとうっておっしゃれば良いのに」

「胡乱なことをいうものではない」

朔之進は、笑顔でそういうと亥助に向かって、

「すまんが、おれんを家まで送ってやってくれ」と続けた。

「わかりました」

「どうとう道之進さまは、姿をお見せにならなかったわね」

おれんは歌うように言い、

「でも、どうして留造親分は、子供たちの白狐面のつながりに気づかれなかつたんでしょう」

「あの面は、お籠もりが終わってから昨日まで稲荷にま祀られていたらしい。

だから、今日、届いたばかりの桐の箱が仏前に供えられていた。それに、神社の話によると、親が子供をお籠もりに出すのを嫌がるが多かったので、ほとんどの老人たちは、自分の家に泊まらせると親たちを騙して孫をお籠もりさせていたらしいな。留造も気づかないはずだ」

「じゃあ、あつしは出かける用意を。雨が降っておりやすんで、傘と、場合によつちやみのかき蓑笠を持って来ますんで」

亥助が出て行くと、おれんは朔之進を見つめていった。

「嘘をつかれましたね」

「いや、あれが、わたしの精一杯の考えだ」

「嘘つき。でも、あたしは嬉しいです」

「わたしを嘘つきという。では、お前はどうか考えたのだ」

「娘婿を殺したのは、おさきさんの娘のおよしさんでしょう。そして子供に見られたと思ったのも。だからあの人は熱にうなされ倒れてしまった。おさきさんはおっしゃいましたね。ちゃんと仕事のできる親を孫娘に残してやる、と。いつも金槌を持ち歩いているのは、下駄職人の技を持つおよしさんの方なんでしょう。おさきさんは、およしさんから話を聞いて、子供たちを殺してしまった」

「それだけか」

「あと、最後の美濃屋の女の子を殺したのも、およしさんのはずです。わけは、おさきさんが自分のために何をしているかを知ったから。おさきさんが隠し持っていた、荒川稲荷のお籠もりの子供の名の写しをこっそり見たのでしよう。長患ながわづらいで力の失せたおよしさんは金槌を使うことができなかった。だから刃物を使った。そして家の近くの五十鈴神社に死体を残してしまった。違いますか」

おれんは挑むように朔之進を見つめた。

「違うな」

朔之進は、目をそらさず応えた。

「お前は間違えているよ」

屋敷を出ると、雨はやんでいた。

少しぬかるんだ道を亥助とおれんが連れだって歩いていく。

空には丸く傘を被った月が見えていた。

「今日は満月だったのね」

空を見上げておれんが呟く。

しばらく二人は黙ったまま道を歩いた。

「ありがとう、亥助さん」

「なんだよ。急に」

「朔之進さまを助けてくれて」

「なんだよ。あの人一人で全部やったんじゃないか。知ってるだろう」

「ううん、違うわ。あの人だね。とつても強くて頭の良い人だけど、赤ちゃんよりも弱い人なの。だから、きちんとした人が手を貸してあげないと駄目なのよ。今日だって、亥助さんがきちんと働いてくれたから謎がとけた」

空を見上げるようにして歩くおれんの目に映る月の美しさに亥助は少し

身震いした。

「おれんちゃん。ひとつ聞いていいかい」

「なあに」

「いや、言いたくなければ、言わないでいいから」

「だから何よ」

「おれんちゃんは、朔之進さまのことが……」

「好きかってこと?」

おれんは黙り込んだ。二人の歩く足音だけが通りに響く。

結局、答える気はないのだ、と亥助が思ったとたん、おれんが話し始めた。

「あのね、あたし見たの。まだ十二だったけど、はっきりとね。あの夜、あたしは、帰りの遅い姉さんを、こっそりむかえに、今歩いているこの道を逆に走ってきたの。」

そしたら、朔之進さまと姉さんの姿が見えて、声をかけようとしたら……黒い影が六人、まっさきに姉さんに飛びかかって胸を刺した。それから朔之進さまが刀を抜いて、たちまち五人を斬り倒した。

でも、姉さんを刺した男は、その隙に逃げてしまった。今から思うと、あとの五人は、あの人を逃がすためにわざと斬られたんだわ」

おれんは、しばらく黙ったあとで続けた。

「そしてそのあと、朔之進さまが、血まみれの姉さんを抱えて、大声で泣いたのよ。それはもう、全然、お武家さまらしくなかった。男らしくもなかった。でも、あたしは、姉さんが死んでこんな事をいうのはおかしいけど、あたしはなんだかとても嬉しかった。そして、あたしも。もし死ぬんなら、あんなふうに死にたいって、そう思ったの」

おれんはまたしばらく黙って、続ける。

「さっきの答えだけど……わからない」

「あたしの胸の中は、五年前のあの朔之進さまの姿で一杯なのね。でも、そ

れが好きってことなのかって聞かれるとわからない。本当に」

——それが好きってことなんじゃないのかなあ。

腹の中でそう独りごちて、亥助は地面の小石をけっ飛ばした。

「痛てえ」

小さな石と見えたのは、大きな石の一部が外に出ていたものだった。

くす。

おれんが小さく笑った。

はは。

亥助も少し笑った。

まあいいか、そう胸の中で呟くと亥助の気持ちは急に軽くなった。

「なに？」

「頭は良いけど、頼りない旦那だもんな」

「そう、頼りない人なんだから」

夜道を歩きながら二人は少し笑った。

笠を被った月も少し笑ったように思えた。

△▽

最後までお読みいただきありがとうございました。

感想などございましたら、ブログに書き込んでいただくか、以下のアドレスまでお寄せください。

e-mail:kazanari@kabulaya.com

鏑谷嘴矢